

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

シンドバッド航海記

海のシルクロード

インド洋のイスラーム商人

先にお話ししたとおり、シンドバッド航海記には二種類の物語があります。大筋ではほとんど同じなのですが、第六航海の後半部分と第七航海がまったく違っているのです。二つの物語の違いについて説明する前に、全体の構成を確認しておきましょう。

バグダードに暮らす貧しい荷担ぎ屋のヒンドバッド(ヒンドバード)がとあるお屋敷の前をとおりかかったところ、そこでは大勢の客を招いてはなやかな宴が開かれていました。あくせくと毎日をすごすわが身とひきかえ、神さまは何と不公平なのだろうと思わず大声で不満をもらしたところ、お屋敷から出てきた召使が、主人がお話したいので中に入ってくださいと言うのです。

お屋敷に通されると、白髭をたくわえた上品な老人が手招きしています。この老人が主人

のシンドバッド（シンドバード）、人呼んで海のシンドバッドなのでした。海のシンドバッドは荷担ぎ屋ヒンドバッドと大勢の客人を前に、七度の航海を物語ることにしたのです。

シンドバッドは親の財産を食いつぶしてしまつたのですが、一念発起して商売を志し、身の回りのものを売り払つて商品をととのえたとバグダードの外港にあたるバスラまで出かけ、遠洋を航海する船に乗せてもらったのでした。手持ちの船荷には持ち主の名を記しておきます。航海の途中で持ち主が死んだ場合には、残された船荷を別の人が売りさばきます。そうして得た利益から手数料を引いた金額を遺族にわたすことになっていました。

シンドバッドが乗りこんだのは、インド洋では今でも使われているダウと呼ばれる小型船だったと思われます。当時のダウ船について詳しいことはわからないのですが、そのほとんどが二〇メートル程度の小ぶりの船だつたようです。基本的には木材と索具、防水用のタールだけで建造され、釘を使うことはありません。小さな船ですから乗組員も少なく、船長と数名の水夫、一攫千金を夢見る冒険商人らとその船荷を載せただけでしたが、これらのダウ船は中国まで到達していたようです。

第四航海では現地の女性と結婚するのですが、その国では夫婦のうちのどちらかが死ぬと、残された方も生き埋めにされてしまうのです。妻が先に死に、墓場となつてゐる地下の洞窟に入れられてしまつたシンドバッドは、葬儀があるたびに生き埋めにされた人を殺しては彼らが携行していたわずかな食糧を奪い、からくも生き延びることができたのでした。子ども

向けにリライトされたシンドバッド航海記では、この話は省かれている場合が多いようです。シンドバッドがバグダードで仕入れた商品については何も記されていないのでわかりませんが、彼が外国から持ち帰った商品については詳しく書かれています。第六航海ではセレンディブ（スリランカ）に漂着し、宝玉や大蛇の皮、沈香木や樟脳などの贈り物とともにセレンディブ王の親書をあずかってバグダードのハールーン・アッラシードの元に届けています。第七航海では、高価な絹織物をはじめとする返礼の品ともどもハールーン・アッラシードからの返書をセレンディブ王に届けています。絹織物はアッバス朝の主要な輸出品だったので、現実にも中世ヨーロッパではイスラーム諸国から絹織物を輸入しており、アラビア文字の入った絹の飾り布が残っている教会もあります。なお、ここで語られているハールーン・アッラシードとセレンディブ王のやりとりにはモデルとなるような史実があったことが指摘されています。

中世の地理書——ワークワーク島と日本

このようにシンドバッド航海記は、ある程度までは中世のインド洋事情を伝えていると言えるでしょう。詳しい成立過程まではわかっていないのですが、船乗りたちの伝聞情報のほか、中世のアラビア語地理書などが下敷きになっているとされています。

なかでもボゾルグ・イブン・シャフリヤールという名のイラン人船長が残した『インドの

不思議』(十世紀)については、シンドバッド航海記に登場するエピソードとの類似点がいち早く指摘されてきました。また九世紀アラブの地理学者イブン・ホルダーズベが書いた『諸道諸国記』に記されたインド洋周辺の地誌情報を参考にした形跡もあります。イブン・ホルダーズベはイラン系の人物ですが、アッバース朝下で駅伝長を務めました。新興のイスラーム勢力に滅ぼされたペルシアのサーサーン朝では駅伝制度が発達しており、数多くの記録が残されていたと思われる。駅伝長を務めたホルダーズベはサーサーン朝時代に蓄積された地誌情報を利用したのではないかとされています。

東洋文庫版には載っていないのですが、ガラン版にはワークワークという島にふれた箇所があります。「ペルシア湾を outcome と、東の海、すなわちインドの海がどこまでも広がっており、アビシニア(エチオピアの旧称)の岸辺から四千五百リユの彼方、ワークワークの島までつづいているのです」。これはガランの創作ではなく、ガランが所有していた最古のシンドバッド写本にもそう書いてありますし、ガランとは別にシンドバッド航海記を訳したラングレが写したアラビア語テキストにも同じことが書いてあります。

ガランはワークワーク島についての訳注を入れており、「ワークワークの島はアラブ人によれば中国の向こうにあり、同名の果実をつける木が生えているという。これはまちがいに日本をさしているが、アビシニアからこれほど離れてはいない」と書いています。ワークワーク島が中国の東側にあり、果実をつける木が生えているという話は古くから伝わってい

ました。ガランが記した注は、日本という固有名を除くと、先ほど紹介したイブン・シャフリヤールとイブン・ホルダーズベの著作に書かれている説明をまとめたものです。

ワークワーク（ワークワーク、ワークとも）とは、世界の東端にある場所と考えられていたようですが、時代とともにさまざまな情報がつけ足されていきました。ワークワークと日本らしき島を結び付ける最古の記録は、先ほどのイブン・ホルダーズベのものだったようです。彼が残した『諸道諸国記』には、「シナの東方にはワークワークの国がある。ここは黄金郷であり……人々は黄金で織った衣服をまとっている」と記してあります。ホルダーズベの記事には、ワークワークは日本であるとは書いていないのですが、倭国という日本の古名との関係から、これは日本をさしているのではないかということが言われてきました。ただし中世アラブの記録に登場するワークワークには日本をさしているとは思えないものもありますから、この島は世界の（東）端にあるどこかを漠然とさしていたのでしよう。

黄金を産するというワークワークの島は、幻想郷でもありました。中世アラブの歴史家たちは、ワークワークの島に生えるという不思議な木について書き記しています。この不思議な木はアラビアンナイトに入っている「バスラのハサン」という日本の羽衣伝説はつろに類似した物語にも登場し、「（ワークの島には）人間の頭と同じ形をした枝のある木が生えている」と記されています。

人間の頭と同じ形（の木）と聞いて、『西遊記』に登場する人の頭の形をしているという



だいし
大食
ダアシッ

江戸時代の『和漢三才図会』に描かれた大食(アラブ)の人頭果



中世アラブ文献に描かれたワークワーク(日本?)の人頭果

人參果を想像された方も多いのではないだろうか。さらにもろいことに、中国での人頭果は遠く「大食」の国に産することになっていました。大食というのはアラブをさす言葉です。この話は日本にも伝わり、江戸時代には挿絵入りの書籍も出ています。つまり洋の東西で同じ不思議現象を相手に結びつけて理解していたこととなります。ちなみに人頭果の正体は、「日本人の中東発見」(杉田英明)で説明されています。

幻獣たち——巨鳥ルフ、海の老人

シンドバッドは航海を続けるうちに、不思議な生き物と出あいます。海の旅ですから巨大なクジラや魚に出あうのはもちろんですが、第二航海と第五航海では

取乳、毎年春末有一等飛禽自天而降如白絲剪肥、大魚高二丈餘長十丈餘人不敢食、割膏爲油、筋骨脊骨可作門扇、筋骨爲脊、曰又有龍涎成塊、沿岸人賣、所謂大魚者鯨乎、鯨評子無鱗魚下

巨鳥ルフ（ロックとも）に遭遇します。第二航海では上陸した島でうたた寝をするうちに置き去りをくらってしまい、遠目に見える白いドームのようなものに近づいていくと、それはルフの卵でした。シンドバッドは、舞い降りてきた親鳥が両脚のあいだに卵をはさんで暖めているうちにターバンをほどいて親鳥の足に自分の体をくくりつけます。そして翌朝、親鳥とともにダイヤモンドの谷に降りたつたのでした。

サイとゾウをいっしょに運んでしまうという巨鳥ルフはマルコ・ポーロ（二二五四〜一三二四）の旅行記にも記されており、マダガスカル島にいたというエピオルニス（英語名はエレファント・バード）がモデルだろうという説もあります。この鳥はダチョウウよりも大きくて背の高さは三メートルもあったそうですが、マダガスカルに人が住むようになったころにはすでに絶滅していたとされています。第五航海では、無人島に上陸した水夫たちがルフの卵を割り、中の雛鳥を引きずり出して食べてしまいます。怒った親鳥が戻ってきたので一同は大急ぎで船を出したのですが、親鳥が巨大な岩を落としてきたので船は大破してしまいました。

これとほとんど同じ話は東洋文庫版アラビアンナイト第十卷「アブドル・ラフマーン・アル・マグリビーが語った巨鳥ルフの話」にも出てきます。こちらはバートンが別のアラビア語刊本から訳出した話ですが、アブドル・ラフマーンの話の来歴はよくわかりません。マルコ・ポーロは中国の宮廷にもたらされたルフの羽についても記しているのですが、これはラ

ファイヤシの葉ではなかつたかと言われているそうです。

さて、怒った親鳥に船を沈められたシンドバッドは、とある島に漂着したのですが、一難去つてまた一難、今度は不思議な老人を背負うはめになってしまいます。シンドバッドは親切心から老人を背負つたのですが、その老人は何があつてもシンドバッドの背中からはなれないのです。こちらが言うことは通じるのですが、老人が言葉を発することはありません。いつも手まねで何かを伝えてくるのです。

ある日のこと、老人を背負いながら島の中を歩いてきたシンドバッドは、落ちていたヒョウタンの実をひろいあげ、ブドウの汁をその中に入れました。やがてブドウ酒ができあがつたころをみはからつてヒョウタンの中の酒を飲むと、すっかり陽気になって歌までとびだします。これを見ていた背中の中の老人は、自分もヒョウタンの酒を飲んだのですが、飲みつけなかつたものですからへべれけに酔つてしまいました。シンドバッドを締め付けていた足もゆるんできましたので、ここぞとばかり老人をふりおとして地面に転がすと、大きな石を投げつけて頭をください、相手を殺してしまつたのでした。シンドバッドは水を補給するために立ち寄つた船の乗組員から、この老人が海の老人としておそれられている妖怪のような存在であつたことを聞かされます。

この後でシンドバッドはココ椰子ヤシを産する島やコシヨウが採れる島、沈香木じんこうの産地などをめぐっていますから、この話の舞台は東南アジアの島嶼とうとうだったのでしょう。海の老人はオラ

ンウータンではないかとする見方もありますが、人間の老人に似た生き物を殺してしまった第五航海は、子ども向けのリライト作品では省かれていることも多いようです。

一つ目の巨人——ホメーロスとの関係

シンドバッドの冒険の中でもっともよく知られているものの一つが、第三航海で語られる人食い巨人との戦いでしょう。この話は、ホメーロスの『オデュッセイアー』との関連が昔から指摘されてきました。続く第四航海にも『オデュッセイアー』に登場する魔女キルケーと関係があるのではないかと思われるエピソードが登場し、島に上陸した仲間たちがあやしい草を食べさせられて分別を失ってしまいます。

第三航海に登場する巨人が『オデュッセイアー』に登場する巨人ポリュフェモスを連想させることは、ガランも気づいていました。彼は一七〇一年の手紙に「シンドバッド航海記には）ホメーロスからとったのではないかと思われる箇所がある。一つは魔女キルケーの話でもう一つがポリュフェモスの話だ」という意味のことを記しています。

ホメーロスに登場するポリュフェモスは一つ目の巨人でした。しかしながら、東洋文庫版のアラビアンナイトに収録されているシンドバッドの第三航海では目は二つですし、同書には二つ目の巨人を描いた挿絵が掲載されています。この挿絵は一八三九〜四一年に出版されたレイン版アラビアンナイトにつけられたものです。ただし東洋文庫版の翻訳者前嶋信次は



シンドバッドが会った獠猛な巨人。ウィリアム・ハーヴェイ画(1839~41、レイン版)

『アラビアン・ナイトの世界』の中で、「彼(レイン)が見たシンドバッド物語の古い稿本には、この巨人は前額に目が一つしかなかったとしてあるよし」と書いていますから、一つ目巨人が登場する古写本があった可能性も出てきました。

では、シンドバッド航海記を最初に紹介したガラン版ではどうなっているかというところ、ガラン版シンドバッドに登場する人食い巨人は一つ目なのです。「……額の真ん中にある一つ目はおこった炭火のように赤く光り、馬のように大きく裂けた口からは長く尖った牙が突き出し……」となっています。とすると、レインが見た古い稿本というのは、ガランが翻訳に使用した写本のことだったのでしょうか。ガランの手元にあったシンドバッド写本はパリの国立図書館に現存しています。ところが、この写本に出てくる人食い巨人は二つ目なのです。

つまりガランは、写本には二つ目と書いてあるところをわざわざ一つ目に変えているのです。ガランと同系統の写本に拠ってシンドバッド航海記を訳したラングレの訳文でも、巨人は二つ目になっていますし、ラングレが巻末につけたアラビア語テキストでも巨人は二つ目です。とは言うものの、もしレインが記している「一つ目と書いてある古い稿本」

が事実だったとすれば、ガランがその稿本をどこかで目にしてそちらの伝承にしたがったという可能性もあります。アラビアンナイト全体に言えることですが、シンドバッド航海記の伝承も入り組んでいますので、最後に簡単に確認しておきましょう。

二種類の写本——後世の加筆か

これまでに写本、稿本、刊本などいろいろな言葉が出てきました。写本とは文字どおり「写した本」です。印刷機が発明されるまで、本はすべて手書きで写されました。稿本には「草稿」「写本」という意味があり、この場合も「手で書かれた文書」です。これに対して刊本とは「印刷された本」のことです。時代や場所によって木版本だったり活字本だったりしますが、わたしたちが一般に本と呼ぶ体裁のものが刊本ということになります。

現在、日本語で読めるアラビアンナイトのすべては写本からではなく、アラビア語なり英語なりフランス語なりの刊本から翻訳されたものです。現在までに出版されたアラビア語によるアラビアンナイト刊本、つまりアラビア語による印刷本としては次に挙げる四種類がよく知られています。

まず、一番古いものとしてはカルカッタ第一版（一八一四〜一八）。これはアラビア語学習者のための教本としてインドで編集されましたが、一卷につき百夜分の物語を収録した二巻本しかありません。しかもヨーロッパへの移送中に海難事故にあい、現存するものはごくわ

ずかです。このカルカッタ第一版はガラン写本をはじめとする古い時代の写本に拠っていません。次にプレスラウ版（一八二四〜四三）。これはヨーロッパで編集されたものですが、存在しないかもしくは出所のあやしい写本に拠っていたこともあって低い評価しか受けてきませんでした。ただし近年の研究によって古い形の話を含んでいる可能性が出てきましたので、今後新しい発見があるかもしれません。三番めはエジプトで編集されたブーラーク版（一八三五）です。ブーラーク版は十九世紀初期にエジプトで知られていた説話を集めたものでした。先ほど触れたレインが主に使用したのが、このブーラーク版です。そして最後がイギリスの手によってインドで編集されたカルカッタ第二版（一八三九〜四二）です。

ただしこれらの刊本はいずれも、写本を綿密に校訂して作られたものではありませんでした。なかでも最後に印刷されたカルカッタ第二版は、当時、知られていた写本中の物語を寄せ集めてできあがったものです。しかしながらバートン版も東洋文庫版もこのカルカッタ第二版を底本にしています。

東洋文庫版のシンドバッドに別系統の物語として紹介してあるものは、カルカッタ第二版に入っているものよりも前に成立した原型に近い話ではないかとされています。ガランやラングレが訳したのはこちらの話でした。

第一回で少しだけ触れたように、最初期のアラビアンナイトは、千一夜には到底満たないささやかな物語集だったようです。しかしながら題名どおりの千一夜分の話を集めるため、

写本表

写本	
9世紀の断片	1947年シカゴ大学東洋研究所が西暦9世紀頃に書かれたアラビアンナイトの冒頭部の文書断片を発見
(10世紀末)	イブン・アンナディームが「千の物語」の内容を記録に残す
(12世紀)	ゲニザ文書の研究で12世紀の記録に「千一夜」の書籍名を発見
ガラン写本	ガランが1701年に15世紀半ばに書かれたと思われる、現在最古の写本三巻をシリアから入手
偽写本	
シャヴィ写本 (18世紀)	中東出身のアラビア語教師シャヴィがガラン訳『千一夜』およびガラン写本を補足するつもりで作り出した写本。アラビア語原典作成よりは翻訳の方がもうかると判断し、有名作家のカゾットとともに『続千一夜物語』を出版。
サッバーグ写本 (19世紀)	中東出身のサッバーグがバクダードに伝わっていた写本(1703年10月21日付)を筆写。ガラン写本、シャヴィ写本、マイエ写本を寄せ集めリライトした偽写本。当時、アラビア語原典の見つかっていなかったアラジンも含まれている。
ワルシー写本 (18世紀)	1910年マクドナルドがアリババのアラビア語写本(ワルシー写本)を発見。最近の研究で、18世紀後半にエジプトに移り住んだフランス人ジャン・ワルシー(ヴァルシー)がガラン版をもとにアラビア語に再訳し加筆したものと判明。

どんどん内容が膨らんでいきました。カルカッタ第二版の第七航海もおそらくは近世以降に書き換えられて追加されたのではないかとされています。

アラビアンナイトは時代とともに加筆され、新たな物語を呑みこんでいきました。次回では新しい物語のなかで最も有名になった作品、アラジンについて見ていきたいと思います。

翻訳本・刊本の対照年表

翻訳本の刊行	アラビアンナイト刊本 (アラビア語による印刷本)			
<ul style="list-style-type: none"> ・ フランス語訳刊行 1704 年～ 1717 年。 ・ 英訳刊行 1705 年または 1706 年から。 ・ 18 世紀末から 19 世紀にイギリスでチャップブックに収録。 	ガラン版	1704 } 1717		
		1814 } 1818	カルカッタ 第一版 (1814～18)	<ul style="list-style-type: none"> ・ イギリス人官史用アラビア語学習の教本としてインドで編集。 ・ ガラン写本と同系統の古い写本に拠っている。
		1824	プレスラウ版 (1824～43)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ヨーロッパの図書館等に散在する写本をもとに編集。
		1835	ブーラク版 (1835)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 17 世紀以降徐々に成立していったエジプト系アラビアンナイト写本をもとに編集。底本となった写本は失われた。エジプト初の国立印刷所で印刷された。以後、アラブ世界での標準テキストとなる。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1838～40 年出版。ブーラク版を底本とする。 ・ 「図書館に」と言われるように学術的だが、詩やわい雑な部分を省いた。 ・ 社会資料としての側面に注目。その注やハーヴェイによる挿絵は中東関係に詳しいとの定評がある。 	レイン版	1838 } 1840	カルカッタ 第二版 (1839～42)	<ul style="list-style-type: none"> ・ イギリスによってインドで編集。 ・ カルカッタ第一版ならびにブーラク版やその底本となったエジプト系写本をもとに校訂された。 ・ ベイン版・バートン版・東洋文庫版の底本。
		1882 } 1884	ベイン版	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1882～84 年に出版。カルカッタ第二版を底本とする。 ・ レイン版に比べるとほぼ完訳に近いが、好色な部分は選択している。 	バートン版	1885 } 1888		
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1885～88 年に出版。カルカッタ第二版を底本とする。 ・ 訳出にあたっては、ベイン版を参考にしたところが多い。 ・ カルカッタ第二版以外のプレスラウ版等に入っている物語についても翻訳しており、一応バートン訳によってアラビアンナイト全ての翻訳を読むことができる。 			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1899～1904 年に出版。フランス語訳。 ・ ブーラク版を底本としているが、チュニアで編集された同系の写本を使用しているとも主張。実際にはアラビアンナイト以外の様々なアラブ物語集を参考にした可能性が高い。 	マルドリ ユス版	1899 } 1904		